陰の力

このお話は、素晴らしいパイプオルガンの演奏者のお話です。

何かいろいろな色の音符がちらばっていますね。

さあ、どんなお話が聞けるでしょうね。

この人の名は、仮に「アントニオ」と呼んでおきましょう。

２

フランスのある村に、とても大きな古い教会があり

その教会には珍しく大きなパイプオルガンがあり

ました。

アントニオのお父さんは、このパイプオルガンの責任者で、日曜日にはミサの間、みんなが神さまをほめたたえて歌う歌の伴奏をしていました。

アントニオは、いつもオルガンのそばに立って、お父さんのオルガンを弾くのをじっとみていました。ですから、小学校に行く頃は、パイプオルガンをひくことができるようになり、時々、お父さんの代わりをすることができるようにさえなりました。

　３

お父さんもアントニオに才能があるのを喜び、歌の伴奏を教えました。

アントニオはオルガンを弾くのが楽しみになり、どんどん上手になっていきました。

いろいろな曲がひけるようになるたびに、かみさまに感謝しながら、ますます練習を重ね、　腕を磨いていきました。

　オルガンを　弾きながらお祈りをすると、心が落ち着き、オルガンの音もきれいになっていくのが楽しみでした。

４

ある時、日中誰もいない教会で、たった一人、パイプオルガンに向かって、マリア様を讃え、アヴェマリアの曲を弾いて祈っていました。

その時教会に、数人の御婦人方がお祈りのために、教会に入ってきました。流れてくるアヴェマリアの曲にすっかり感動してしまい、いったい誰が弾いてるのかき合いながら聞きほれていました。

一体誰が弾いているのでしょう。と囁き始めました。

アントニオは人の気配に気づいて、祈りの邪魔になると思い、すぐにやめました。

聞いていた人たちは、「どうぞ続けて下さい、なんと素晴らしい音色でしょう。」とうっとりするのでした。アントニオのオルガンはだんだん有名になり、いろいろな人が聞きに来るようになりました。

５

噂は村から町へ、町から都へと広がり、みんなその音色を聴きたいと、田舎の教会を訪ねてくるようになりました。

「素敵だったわ。」

「天国ってこんな感じかななんて思うくらいだったわ。」

「わたし、感動して涙が止まらなかった！」

「アントニオって、きっと素晴らしい音楽家になるわ。」

街も都もアントニオで持ちっきりでした。

６

噂が王様の耳に入らないはずはありません。王様は有名なパイプオルガンの奏者の音楽が聴きたくなり、おきさき様や大臣たちやお供のものと、その教会に行くことになりました。

村では王様が村においでになるというので、村では大変なことになったと大騒ぎでしたが、アントニオは、きく人の心が安らかになるようにと祈りながらお引き受けしました。

王様は、どんな音楽が聴けるか、みんなのうわさを聞いていろいろ想像して楽しみにしていました。

７

王様が教会においでになる日になりました。いよいよその日です。村の教会はまるでクリスマスかご復活のようにみんなが集まりました。

教会の一番前の席の中央に王様、隣に女王様その隣はお姫様、そして大臣やいっぱいの人。

シーンとした空気が　教会いっぱいに流れました。

アントニオはオルガンの前に座り、大きく息を吸い、

ゆっくりとオルガンに指を運びました。

最初の美しい音が静かに流れ出しました。みんな息をのんで、耳をそばだてていました。

序曲のしずかな流れにみんながうっとりした途端。

ブワッアー　　ブワブワブワーーッ

８

どうしたんだ！

パイプオルガンから流れる音は、突然ウワーッとなったり、シューッと小さくなったり、早くなったり遅くなったり、大きくなったり小さくなったり、めちゃくちゃな強弱でテンポも崩れ、息が苦しくなりそうでした。

アントニオはどうしたのかわかりません。

一生懸命にひくのですがどうにもなりません。弾けば弾くほどめちゃくちゃです。

ど、ど、どうしたのだ！！みんな顔を見合わせ、人々は総立ちになりました。

９

王様は大声で

「ど、ど、どうしたのだ！」と怒鳴り、お姫様は震え、女王様は外に飛び出してしまい、泣き出す人や叫ぶ人に合わせるように、音は高くなったり低くなったり、まるで動物園のようになりました。

やがてみんな外に出て、教会にはアントニオだけになりました。

１０

アントニオは、はっと気がついて、オルガンに空気を送る調整室に駈け込みました。

そこに、見たこともない少年が、震えながら立っているではありませんか。

「誰だ！お前は！！なにものだ！！」

「パンブレンの息子です。」

「パンブレンの息子？パンブレンはどこだ！」

「昨夜、遅く、亡くなりました。」

「何！パンブレンが死んだ！？」

「はい。父は亡くなりました。」

『それで。お前が･････パイプオルガンに風を送ったのか・・・・・

「はい、わたしです。」

１１

父は私を呼んで今日のこの演奏の事を、苦しい息の中こうはなしました。明日はご主人様の弾くパイプオルガンを王様やおきさき様にお聞かせすることになっている。パイプオルガンは私がいないと鳴らないのだ。パイプオルガンは空気を送らなければ鳴らないのだ。

いいかい、お前が行って、私の代わりにやってくれ。調子が分からないかもしれないが、ふいごのようにそっと空気を送ればいい。ご主人様の音楽を聴きながら、いい音が出るようにと心を込めて空気を送ればいい。気持ちを込めればいい空気が届くだろう。頼むぞ。そういって私の手を握りながら目を閉じてしまい、なにも聞く暇もなく・・・亡くなりました。

私は調子がわかりませんが、今日、父の事を思って

がんばったのですが・・・　パンブレンの息子はこう言って泣きました。

「・・・・・分かった　お帰り。お父さんのそばに行って今迄ありがとう。とお礼を言っておくれ。

アントニオは思いがけないこのことが心の奥に突き刺さり、神様からの戒めを聴いたように思うのでした。

１２

その日、アントニオは一日中考え込みました。私は今まで、自分が弾くオルガンの音色の美しさ優しさ　荘厳さなどで自分の腕の良さ、才能を見事に伸ばして、こんなに有名になったと思って自負していた。パンブレンが言うようにパイプオルガンに送風する人がいなかったら音は出ないのだ。パンブレンは私がオルガンを弾く時、いつも何も言わず、当然のこととして、音を出すことをしていてくれたのだ！彼がいなければ・・・。

私がここまで来たのはパンブレンのおかげだ。こんなに目立たない仕事を、他者の成功のためにと、支えているパンブレンのような人がどんなにたくさんいる事だろう。

そうだ．人は皆、今の自分があることは誰かが助けているからだ。自分の才能が輝くときは陰の力、しかも大きい陰の力があるのだ。

私にはパンブレンが。そしてあなたには、いろいろ教えてくれる人が…・

１３

ほらテレビをごらん。今ステージで歌っている歌手を。彼女のいい声をもっといい声に聞かせるために、さびしいときや喜びの言葉を歌う時、真っ暗な部屋で多くの人が舞台の一人のために、効果を上げて、成功させるため汗を流してライトを動かしている。誰も知らないところで働く人がいる。

人はみんな、みんな、誰かとつながって、助けられ守られているんだ。

私は叫びたい

みんな陰の力を信じあおう。陰の力はどこまで広がるのか考えたら天まで、天の神様まで広がるよって！

周りに目を向けて、私を支えてくれる人に感謝を。

１４

そうです。人は皆、誰かの力で助けられています。　男の人も女の人も働く人も勉強する人も。お年寄りもあかちゃんも。病気の人もお医者様も。子供も大人も。そして良い人も悪い人も。鳥も花も空も山も。みんなみんな一番大きな影の力の下で守られながら、お互いに小さな陰の力で助けられているのです。

その一番大きな影の力、それは神様の愛の力、全ての人を守る陰の力です。

パイプオルガンの名人アントニオさんは、それからどうなったのでしょう。ね！